ー旭彩、旭典、立方　禅師と正宗ー大迫旭山　大楠公ー矢吹旭美津、久徳旭蘭　北の庄ー林　田旭城　曲垣平九郎ー会主小川旭典　壇の浦　秘曲ー板谷旭邑　安宅ー旭城、旭蓮、旭甲、　旭萃　加藤清正ー松本旭柳　茨木ー山崎旭萃　千代の寿ー歌八人、紘八人、立方。

薩摩琵琶晴風会春の大会

五月一日(木)昼東京中野区文化センター（一〇〇〇円）。涛陽江ー望月啞江　常陸丸ー太田尾　送別ー中山　白虎隊ー岩崎竜風　噫八甲田山ー諸遊清風　鴨越ー本橋錦颯　須磨の春ー竹内寿風　茨木ー山崎典水　湖水乗切ー大関英子　夢将門ー高田瑩水　竜の口ー緒方晴舟　加藤清正ー平田旭峯　青山播磨ー杉山雅俊　俊寛(下)ー山下晴楓　羅生門ー野口嶮水、福島脹水　安達ケ原ー鈴木流泉　吉野落(初)ー山本鶴声　鉢の木ー会主浅野晴風　外に菅根悠光、永田昧滉社中の吟舞黒田武士、日本を愛す、兵児謡、本能寺、菅公、川中島、児島高徳の七題、寿風会員の詩吟三題、中村晴声の吟詠一題。尚当日演奏の歌詞数題と会主晴風氏の破乱に富む半生「我が生いたちの記録」のを記載した小冊子を来聴者に配布した。

鶴彦会月例研修会

五月二日(日)朝十時ー夕五時浜松市積志公民館。由井正雪ー小野ひろみ（中二）　菅公ー小野しげよ（小三）　大楠公・弁内侍ー小野鶴彦　木枯ー石川晃豊　物狂ー高林愛子　児島高徳・三方原ー三上晃城　小敦盛ー伊藤晃嶺　彰義隊ー染谷晃岳　灘廻りー竹原花子　琵琶法師蟬丸・巴御前ー柿沢篁峰。尚春の発表会は五月三十日(日)於浜松市南公民館。

京都琵琶協会五月例会

青葉若葉の目にしみる五月九日(日)昼会員梅原旭濤女史宅。例の通り二、三会員の研修演奏に続き諸般の協議や芸談雑談などで楽しい半日を送り夕食には名物筍料理に舌鼓をうって七時過ぎ解散。出席者＝戸田旭公、田中鵬水、梅原旭濤、矢吹旭美津、安住旭康、牧南水、古谷竟水、荒木旭媛、水内嶺水、植村翼水。

筑前琵琶松本旭柳演奏会

五月十六日昼名古屋市大須中小企業会館。ゲスト押川旭葉、前田秋声両氏。（次号詳報）

故板谷翼氏追悼演奏会

五月十六日昼広島市中国新聞社ホール。主催板谷旭邑女史、後援旭萃会。（次号詳報）

故大舘洲楓氏追悼演奏会

五月十八日昼東京渋谷東邦生命ホール。一門数氏の外松田静水、辻靖剛、山崎旭萃、小山田賞水、雨宮薫水各氏協賛出演。（次号詳報）

筑前琵琶温習会

五月二十三日昼京都東山安井金比羅宮会館、主催梅原旭濤女史、後援三ッ和会。（次号詳報）

京都三美会TV放映

五月二十三日昼一時近畿放送。（次号詳報）

若手琵琶人の会

五月二十九日午後三時東京渋谷東邦生命ホール。若手琵琶人十二名の外浅野晴風、藤巻旭鴻両氏特別出演　（次号詳報）

筑前琵琶女流紅会演奏会

五月三十日昼東京日本橋三越劇場。名花数名の外若水桜松氏等協賛出演。（次号詳報）

西川旭操女史転居

姫路市田寺池の内八四二ノ八（電話九六一三八四四番）に転居

長谷川博章氏

老衰のため四月十三日逝去、享年八十二。大正六年永井重燁師に入門、正派薩摩琵琶の奥儀を極めた。京都四明会々員。謹みて哀悼の意を表し御冥福を祈る。

（予　告）

○…京都琵琶協会六月定例茶話会　六月五日(土)昼一時、会員平井春嶺氏宅

○…各流派琵琶名流演奏会　六月四日(金)正午東京大手町農協ホール、主催日本琵琶楽協会。東西各地の男女名流二十四人競演。

○…故河口旭湖女史追悼演奏会　六月六日(日)正午京都東山仁王門電停前本妙寺本堂。主催荒木旭媛女史、後援京都琵琶協会。

きがとあ

あっというまに花が散り新緑が終って又鬱陶しい梅雨期が旬日のあとに迫って来た◉毎年のことながら梅雨だけはいやだと思うが農作等の世界では梅雨は欠くべからざる條件で勝手な言を弄しては罪が当たろう◉春の好季節で演奏会などの報道記事が山積して予定していた坂本錦道先生、辻旭城先生、山川流水先生の貴重な御寄稿を本号に掲載することが出来ず、執筆者並びに読者各位に対し誠に申訳ない次第、不悪御寛容の上次号を御期待下さい。

昭和五十一年六月一日発行（非売品）
編集者　植村翼水
発行所　京絃社
〒569　高槻市津之江北町一一ノ二三
電話　〇七二六（八五六〇）五一番

琵琶機関紙　京絃　第二六四号　京絃社

狂酔亭漫録第百廿一

小督の局（三）

古谷竟水

誰してか召さるべきなれば、汝帰りて具して参れ。とぞ仰せける。仲国承り、御前を立ちけるが、恐ろし、太政入道（清盛）に聞き付けられ、如何なる目にかあはんずらんと思ひけれども、綸言なれば争でか背き奉るべき、縦ひ召し出され首を刎ねらるゝとも如何はせんと思ひ、宿所に帰り牛車支度して嵯峨に参り、御気色の由申しければ、小督殿、我再び憂目にあはんより、此のついでにとそいかにもならめ。と宣ひけるに、主の女房、共に様々誘へ申しければ、泣く泣く内裏に帰り給ふ。

君斜ならず御悦びありて、或局に召し置かせ給ひけり。其の御腹に姫宮一人出で来させ給ひけり。後に坊門の女院（御名は範子、六角内親王と申上る）と申しし彼の姫宮の御事なり。平家の方様をば深くつゝませ給ひけるに、入道何としてか聞き附け給ひたりけん、源大夫判官を召して、やゝ季定、小督失せたりとは君の御虚言にてありけるぞ、未だ内裏に候なり、急ぎ召し出して失ふべし。とぞ宣ひける。季定承り、所縁を以て小督殿をすかし奉り、入道にかくと申しければ、流石女なども失はん事は、世の聞えも穏便ならず、只姿を替へて追放ちて、扨ぞ君は思召し捨てさせ給はんずる。と宣ひければ、季定承り、目もあてられず思ひけれども、東山の麓清閑寺と云ふ所に具足し奉り、姿を替へさせ奉る。

翡翠（緑の黒髪）のたをやかなるを剃り下し、花色衣の御袖を、憂世を餘所の墨染に替へけるこそ悲しけれ。これを見奉りける人、上下袂を絞りけり。今は疾く疾く御心に任せとて、在所も定めず追放つ。

此の女房と申すは大織冠の御孫、淡海公には一男、武智麿より十二代、故少納言入道信西の孫なり。かく龍顔に近附き進らする上は、国母后に祝はれ給はん事も難かるべきにあらず、平家は下国の守をだにもきらはれて、只今家を起したる人ぞかし、さまでの振舞情なしとぞ人厝を返しける。

桜町中納言は最愛の女子（小督）を斯様にせられ給ひ、如何にすべしとも思ひ給はねば、しばしば籠居とぞ聞えける。

冷泉少将（小督の先の愛人）此の由聞き給ひ、あな無慙や、さては終に妨げられにけり、尋ね行き訪らはばやと思はれけれども、入道のかへりきかん事を恐れて、思ひながら、偖やみ給ふ。

新の尼御前は、出家はもとより思ひ儲けし事なれども、敢無く人に姿をかへられて、如何なる事をか思はれけん、さして行くべき方も覚えねば泣く泣く嵯峨へ帰り給ふ。暫く爰に坐しけるが、後には大原の別所に閉ぢ籠り、行い澄まし給ひけり。御年二十三歳、しかるべき形なり。

主上は聞召し、朕天子の位にて、これ程の事を叡慮に任せぬ事こそ安からね。と思召されけれども、世に披露はなかりけり。深く思召し出したる時は、只御悩とて夜のおとどへ入らせ給ひけり、小督の局の心ならず尼になされたる所なれば、御なつかしく思召しけるにや、朕をば必ず清閑寺へ送り納めよ。と御遺言ありけるこそ、御愛執の罪とは云ひながら哀れなれ。入道は斯かる悪行し給ひて、流石おもはゆくや思はれけん、福原（兵庫）へ下り給ひにけり。

（主上は）小督局かく事にあひぬと聞召し後は、御恋しくも御うらめしくも思召して、つやつや供御も参らず、只夜のおとどに入らせ給ひて、長き冬のよもすがら、御ながめがちにて明し暮させ給ひけるに、打続き南都炎

上の事聞召して、いとど御悩重らせ給ひて、終に隠れさせ給ひにけり。

凡そ此の君仁風率土に覆ひ、高徳配天に顕はる。有道の政と無偏の恵み、誠に堯、舜、禹、湯、周、文、武、漢の文帝と聞えしも、かくやとぞ覚えし。されば後白河法皇の仰せには、代を此の君につがせ奉りたらましかば恐らくは延喜天暦の昔にもたち帰りなんとこそ思召しつるに、先立たせ給ひぬれば、我が身の御運の尽きぬるのみにあらず、国の衰弊なり、民の果報の拙きが故なり。とぞ嘆かせ給ひける。

以上で源平盛衰記の小督に関する記述は終っているが、平家物語にも殆ど同様の記事がある。然し嵯峨野に於ける小督仲国対面の場面は、平家物語は格調高い美文を弄して世に喧伝されているが、その前後の関係は盛衰記の記述が遙かに詳細を極めているので、本稿では敢て之を抜萃して御紹介したのである。

唯茲で私が一言したいのは、琵琶の小督の曲は、帝と小督の情事を単に詩情溢るゝロマンとして、夢の如き美辞麗句を連ねて平家物語より取材したもので、明治大正期の若い男女を感激せしめた名曲であるが、真の内容は更に根の深いもので、事実小督の遁世は清盛の殺意を身に感じての潜伏であり、仲国の捜索も平家に知られた場合は首を刎ねられるのを覚悟しての仕事であったのだ。又小督が御文を顔に当てゝ泣き伏したのは命の危険を感じての事であった。

従って琵琶曲小督を演奏される方は、美しい声、よい節廻し、綺麗な弾法で演ずる以外に、小督仲国両者の必死の心理を肚に収め、その意気が表現出来る様な気組で演奏すれば、より以上悲愴の感が完全に演出可能の事を銘記されん事を切望するものである。

（附記）一説に清盛が小督追放の際、その髪を断ち、耳鼻を削って清閑寺に放逐した。時に年二十三、その終る処明かならず。更に一説に、大堰川に身を投じたともいう。

（此項終）

我が道を行く

六十五年（三八）

西郷天風

さて、久しぶりで帰った私は、旅行中の緊張から開放された感じで何となく疲労感を覚え乍ら、何よりも先づ関係先への挨拶が第一と心得、大勝館を初め日活、国活等各会社を訪問すれば、何れも次週出演の都合を問うのである、思えばこの五週間に亘る不在中の東京ではいよいよ琵琶劇流行の兆を呈し、日活では目玉の松ちゃん事尾上松之助主演の大がかりな義士銘々伝や、高山彦九郎などの純琵琶劇を上映すれば、国活では大河内伝次郎、市川右太衛門など当時の名優達による乃木大将のシリーズ物や、血染の聯隊旗など新劇系の映画で之に相対し、やがて国活から分離して新たに誕生した松竹キネマが、洋行帰りの井上正夫を主班とする高瀬実や水谷八重子等を擁して、「大尉の娘」や「地獄船」「寒椿」などの上映にかって映画ファンを喜ばせる等、三社三様の名画による琵琶劇の声価は、いやが上にも高まったのであった。

ところでこの琵琶劇は、その製作に当って初めから歌詞を用意されたものは殆ど稀で、映画が出来上ってから歌詞を作るのが常だった。従ってどの様な映画でも、歌詞さえつければ琵琶劇として上映し得る自由さがある故に、甚だお粗末なものが出廻るに至った。

たとえば歌詞についても「槍をかづいて駈出したり」とか、「鳥の毛羽をばむしりつゝ」或は「お鉢のふたを取り見れば」などと、映写幕に見らるゝ動作と同じことを文句で唄い合せる為には、其処だけフイルムの回転速度（其頃の映写機は総て手廻しで一分間十六駒が標準）を半分位に落しても、尚歌はおくれ勝で琵琶は弾く暇もない、それでも琵琶劇と云うのでは、誇りたかき琵琶師達の面目上これを看過するに忍びず、必然的に君塚系の「映画琵琶聯盟」と云うのが誕生し、やがて杉山清峯の「映画琵琶師協会」が結成されるに至った。尚この杉山氏は、我国映画界第一の開拓者横田尊之助（横田商会主）と苦楽を共

にした斯界の先駆者で、玄海琵琶開祖の一人でもあった。

斯の二派の存在によって映画琵琶師の質の向上は勿論、映画琵琶に対する一般世人の関心も高まり、一流琵琶名手の参加希望者も現われるに至って、遂に大勝館に於ける琵琶劇映画大会にまで発展したのであった。

ところがこの大会が、予想をはるかに突破して毎日大入満員の盛況が続き、或年何回目かの大会ではそれまでにない大ヒットで、猪一枚（十円）入の大入袋を楽屋の外来客にまで配当する勢いを示し、私もその恩恵に浴した思出がある。

因に当時の十円札一枚は、今日に換算すれば約一千倍と見て正に一万円に相当する額で、いかに琵琶劇が人気を呼でいたことか。

この大ヒット騒ぎは市内の特約館にも反映し、この大会計画に乗出す有力館が続出して、我々映画琵琶師も二館かけ持ちの嬉しい悲鳴がしばらくは続いた。

それは兎も角、私が冨士山麓から帰って丁度一年目の九月、大勝館で何回目かの琵琶劇大会が催され、専属以外の名手数名と共に私も出演しておる時だった、大勝館職員の幹部から、伊豆下田の日活館で琵琶劇の上映がきまり、琵琶師銓衡の結果私に白羽の矢が立ったとのことで、折角好評一番の噂高き折とは思ったが、大勝館幹部からの希望とあっては後日の思惑もあり、一週間の予定で承託することになった。そこで日活本社からフイルムを預り、道順を修善寺線の大仁からバスで天城山頂を越え、下田町に降りる前后四時間のコースを教えられ、翌日その大仁に着いて見れば既に最後のバスが出発した後だった。止むなく駅前の小高い古風な旅館で一夜の休養を取り、翌朝一番バスに乗ったのはよいが、中腹あたりからバスの走りが乱れ勝で心許無く、前の方を見れば路巾がバスの車体とギリギリの所が多く、麓の方を見おろせば丁度高い断崖から下の方を窺くのと少しも異ならず、しかもバスは走っておるのだから気の弱い者は到低この景色は眺められぬであろう。私も二、三度、恐怖感におのゝいたものだった。かくて二時間余り走り続け漸く頂上に近いトンネルの手前で一旦停車し、其処に用意された茶店で暫時休息の後、再びバスに乗ってトンネルをくぐりぬけ、暗闇から明るみに出た途端、見渡す限り広大な大海原の上空さして突進するの感に一瞬ゾッとした。今日でこそ飛行機でこうした情景も珍らしくはないが、バスでは機上の安心感はなく、思わず肌に泡を生ずる始末で私には生涯に只一度の忘れ得ぬ経験となった。

それからは山を降る一方で、町え出たのが昼少し過ぎた頃だったろう、程なく停留場に着くや、人力車を拾って目的の映画館へと走らせれば、名にし負う「唐人お吉や黒船」で知られた古風な町のたゝずまいが、冨士の裾野とは亦異なった風情で、磯くさい田舎に育った私に迫って来るのであった。

私は忘れていた何かを思い出したように、急に気が晴々しくなるのを覚え、一人懐旧の念にひたる思いであった。

西川旭操女史

テレビ琵琶放映

四月八日夕六時テレビ10チャンネルで兵庫県加古川市鶴林寺の国宝聖観音に云い伝わる「あいたた観音霊験記」の琵琶歌を西川旭操女子が放映演奏された。歌詞次ぎの通り。

あいたた観音霊験記

古の流れの水清く　白砂青松瀬戸の海
稲実の里に聳え建つ　播磨法隆寺とぞ人の呼ぶ
刀田山鶴林寺の物語り」　今を去る千年三百有余年　聖徳太子御自ら崇め給いし聖観世音菩薩　ある夜三人の若者が　渡金黄金仏の尊像を　盗み出だしてはるばると　淡路島にぞ運びける」　さても得たりと盗賊は　鞆にかけて七日七夜　一挙に槌を振りかざしエイッとばかりに打ちおろす　南無三宝　尊き姿一瞬に　砕け散るかと思いきに　生ける仏の御声にて　打ちたる者の耳底に　「あいたたッ」とぞ響きたり　こは何事ぞと打驚き連れの二人にその由を　事細かにぞ語りける友の一人は呵々大笑　此度は吾が引受けて一気に打砕かんとぞ鉞を　頭の上に高々と力をこめて振りかざす　暫し瞑目寸時を経て猿の如く打ちおろす　音は確かにしたれども目を見開けばこは如何に　もとの像はそのま

まに　再び浄き声ありて　「あいたた」「あいたた」と聴えたり　あとの一人は呆然とこの有様を見たれども　さてしもあらじと鉄棒を　阿修羅の如く振りかまえ　無二無三にぞ打ちおろす　あたりは一瞬静寂な　霊気あふるる夢心地」　ややおもむろに声ありてあいたた、あいたた、あいたたと　物悲しげにぞ響きけり　この声胸の心底に　泌みわたるごと激したり　盗賊共は生気なく　唯悄然と声もなし」　その後正気をとり戻し　かかる貴きみ仏を　己れの慾に目のくらみ　盗みを謀りし大罪を　漸くにして気付きたり」かくてその夜船に乗り　ひそかにもとの霊場に　返しまつりて尊像は　誰云うとなく「あいたたの聖観世音大菩薩」と　語り伝えて今の世に　千古の功徳厳然と　立たせ給うぞ有難き　有難き　「古の鶴の林に散る花の匂いをよする高砂の風」　（昭和五十一年一月二十二日太子縁日鶴林寺長史幹覚盛謹作）

世紀の祭典
岡部錦蝶米寿
祝賀琵琶演奏大会

緑したたる四月二十九日、天皇誕生日の佳き日、大阪北堀江の市立西区民センター一階大ホールに於て、米寿を迎えた岡部錦蝶女史の祝賀演奏大会が、五人の令息息女の共同主催で東西各流派琵琶大家十数氏欣然協賛出演して、平井春嶺氏の司会で盛大に開催された。

昨夜来の雷を伴った豪雨も午前中に上がり暑からず寒からずの快適季候で、正午の開演前から聴客は続々と詰めかけて、さしもに広い会場も全演奏が終るまで満員の盛況を呈し、

各方面から贈られた数基の生花々輪が舞台と両側に所狭しと並べられた中に、日本芸能顕彰会祝贈の美事な大トロフイが燦然と光彩を放ち、多年に亘る女史の琵琶界に貢献された功蹟を如実に物語っていた。

女史は明治二十一年小田錦夢氏の四女として東京芝に生を亨け、錦虎、錦豹、錦鶯、錦蝶の四兄姉、叔父錦蛙氏と共に〝琵琶一家〟として有名で、十三才から斯道に入って今日まで実に七十五年の永きに亘って琵琶一筋に生き、親孝行揃いの五人の令息息女や令孫達に囲まれ、京都薩摩琵琶四明会、東京同正絃会に籍を置いて琵琶を楽しんで居られ、今尚矍鑠として本日演奏の二曲も八十八才の高齢と思えぬ堂々たる演技で、聴衆席から送られる万雷の拍手喝采は暫し鳴り止まなかった。而かも人格円滑、謙譲の美徳は女性の亀鑑として万人敬慕の的である。

夕六時盛況裡に終演、記念撮影の後関係者一堂に集まり女史の健康と本日の成功を祝して乾盃、目出度く閉会した。

（当日のプログラム）あの山・仙平さん、門琵琶ー四明会、正絃会々員数氏合奏　彰義隊ー平井春嶺　細川ガラシャ夫人ー島津天嶺　城山ー令息岡部精之、令孫岡部要一　義人天野屋利兵衛ー小野鶴彦　桜狩ー有馬南城　弁内侍ー息女伊勢谷安江　小督の局ー植村寞水　吉野落(一)ー須田誠舟　同(二)ー岡部錦蝶　挨拶記念品贈呈、献花、謝辞、祝電披露（約七十通）　菊水の旗ー三浦蓮水　旅順港ー小畑鶴峰　雪晴れー野尻摂水　白虎隊ー仲川秀邦　児島高徳ー広瀬緻水　舞扇鶴ケ岡ー柴田旭堂　新撰組ー小川吟水　弾法ー辻靖剛　本能寺ー岡部錦蝶　祝歌蓬莱山（一句廻し）ー正絃会・四明会々員数氏。

（註）本演奏会は昨秋十一月三十日開催予定のところ岡部女史の微恙と交通ストのため本日に延期されたものである。

台湾演奏旅行記

富山旭貴

三月二十六、三十一の両日、中華民国台北市に於て琵琶を始め琴、一絃琴による華々しい演奏会が行われました。一行は小泉栄子先生を団長とする大阪玲紫箏会の琴八名、琵琶矢吹旭美津先生とその門下田中鵬水、吉田旭礼、富山旭貴の四名、一絃琴大西一猷先生、笙大西善明先生、以上十四名が「日本大阪京都市中華民国青年節祝賀団」として、中華民国の人間宝と呼ばれる七絃琴の名手、梁在平先生の招待を受けて渡台いたしました。

二十六日大阪国際空港より二時間、瞬く間に海を越え、機上から見る台湾はまだまだ素朴で緑豊かな印象でした。然し十時五十分台北空港に降り立ち、市内に入れば流石首都だけに都会のムードを免れません。（中略）街の中に昔日本政府が残した赤練瓦造りの立派な欧風建築物があり、現在は台湾総統府として使われている由。台北市の女子高校生の制服はズボン姿で、銃を構える兵隊をあちこちで見かけるなど、戦時体制下の国情を垣間見る思いがしました。

中国では五絃琵琶、一絃琴は既に途絶えてしまい、日本でその独得の形が完成したと云えましょう。為に台湾での琵琶演奏には特に関心を寄せられ、演奏会場に於ても幕間を縫って矢吹先生に何彼と質問を投ずる人々が見受けられました。又師から弟子にその名の一字を受け継いでゆく伝統の共通点を指摘され、喜ばしい事だと感嘆の言葉を頂きました。

その日午後から市内の国際公共関係有限公司に於て中国側同好の士、並びに台湾各紙新聞記者多数を招き、日本の琵琶、琴、一絃琴の紹介演奏がなされた後、記者達の熱心な質問が続きました。琵琶は、絃矢吹旭美津、歌田中鵬水による「君が代」を披露し、是等の記事は翌日、台湾最大の中央日報を始め多くの新聞に取上げられました。夜は台北市五洲商業大厦九階に於て、我々一行のためのサロンコンサートが開かれ、その席上琵琶合奏曲「五絃弾」を矢吹、吉田、富山の三人で演奏しました。聴衆は多くが男女大学生で、寛ろぎながらも熱心に耳を傾けていました。

その夜は梁先生の斡旋で台湾第一、世界第七位と評される圓山大飯店、別名グランドホテルに投宿。市内を一眸に収める高台にあって目の覚めるような豪華な中国宮殿式の旅館で、一般の人が宿泊するのは稀であり、多くは各国々賓用ホテルとして利用され、私達は国賓級のおもてなしに大感激いたしました。

翌二十七日は、台北空港から空路約二十分の花蓮を見物（中略）して台北に帰り、夜は青少年国楽グループによる歓迎演奏会に出席し、珍しい中国古典音楽に昼間の疲れも忘れて聞き入りました。中国では古い伝統を護り抜く姿勢が一貫し、多くの若者が誇りを以て国粋芸術に携っています、国自体古典音楽を「国楽」と呼び古い伝統の保護に力を入れていると見受けられ、現在の我国人の、伝統を軽視する風潮が今更ながら残念に思われてなりませんでした。

二十八日は台北市近郊の国立故宮博物院その他を見学（中略）。

二十九日は特等級の旅客列車約三時間で台中着。台湾の汽車は最高時速が六十キロで、我々には些かじれったいのですが乗り心地は

去る四月二十九日（天皇誕生日）、大阪西区民センターにて岡部錦蝶米寿祝賀琵琶演奏会を催しました際は全国より諸先生の御協賛御出演を得、お蔭を以ちまして大盛況裡に終了し、錦蝶はもとより主催者一同感激いたしました次第でございます。

茲に厚く御礼申し上げ、何卒今後とも宜敷御後援御指導を賜わるよう懇願申し上げます。

昭和五十一年五月

岡部錦蝶米寿祝賀琵琶演奏会
主催者　岡部錦蝶親族一同

非常に良く、市内見物をして夜は台中の名門東海大学の教授招待宿舎に一泊し、学生達とも和やかに交歓、楽しい一夜を過ごしました。

三十日、朝早く東海大学をあとに台中の名所を見物（中略）して再び台北へ。

三十一日大会当日は台北市内実践堂に於て、実践堂学術活動組、中華国楽会主催「中日第二届・箏楽賞会」として大歓迎の中で日本側は二部に亘り演奏が行われました。開演午後七時半には既に一、二階共会場は満席となり、十時半の終演まで立ったままの聴客も多く、終了時間がきても席を立つ人がなく、日中の演奏者達は嬉しい悲鳴をあげた程でアンコールを振り切っての閉幕でした。琵琶演目は、一絃琴「須賀」を大西、矢吹両先生で、「千代の寿」を矢吹、吉田、冨山、「君が代」を矢吹、田中、とそれぞれ合演。「君が代」は祝賀之歌として紹介され、特に好評を博しました。

会場貴賓席は多数の名士高官で満席となり、日本人代表は楽屋まで激励に来て下さり晴れがましい限りで、大成功の興奮覚めやらぬまま深夜打ち上げパーテーで閉幕となりました。

四月一日、大役を果たした我々一行は、滞在中親身にお世話頂いた梁先生御夫妻、救国団の皆様その他の方々に心から御礼を申し上げて日本の空へと飛び立ちました。振り返ってみれば、台湾の方々の人情の厚さや御親切には今更ながら感謝の念に耐えません。日本人が大切にしていた礼儀や道義など、今は台湾で却って教えられる立場となりました。

思い出は筆紙に尽くせませんが、何はともあれ、大過なく民間使節として古典音楽による文化交流の大役を果たし得た事は、大きな名誉であり喜びに耐えません。

（各地見学の模様等についても詳述してありましたが紙面の都合で琵琶楽に関係の少ない個所は割愛致しました。不悪）ー係ー

豪華絢爛　八千代会の現代琵琶楽吟演奏会

天津八千代女史主宰の八千代会が和鶴会協賛で陽春四月二十四日(土)昼京都四條の山一大ホールで首記開催、一門の外筑前薩摩の名手数氏を始め高橋法吉弘社中の尺八、志賀山一流中村万作の舞踊、上野ゆたか社中の和装着付等の賛助出演でそれぞれ琵琶演奏の中に組入れられ、華やかな絵巻が繰広げられたが、生憎前夜来の降雨と休日でないことが聴衆の出足を阻んだか、広い会場に相当の空席があったのは返す返すも惜しかった。五時半終演（五〇〇円）。プログラム＝御祝儀冨士山ー会主外数氏、さくらー天津、西川旭操、梅原旭濤、竹本旭将外、楽吟琵琶の賦ー天津、宮垣鶴千栄、別所鶴美外、姫百合の塔ー石橋旭嶺　塚原卜伝ー戸田旭公　大楠公ー竹本旭将知盛の幻想ー天津八千代　高松城ー塩谷旭洲　坂本竜馬ー坂田旭弘　粟津の露ー木内鶴悠起、天津、西川　新撰組ー梅原旭濤　水天門ー平井春嶺　ふるさとの心浜辺の歌ー天津、琵琶二人、尺八、マラカス、ボンゴ各一　特別番組大和の章ー天津、塩谷、西川、梅原、地方立方大勢。外に詩吟十四、民謡三、奇術一。終演後記念撮影に続いて乾盃、日出度く散会した。

錦心流琵琶演奏会

三月二十一日(日)昼甲府市遊亀会館、主催是水会、後援一水会横浜支部外。前奏ー五人　湖水棄切ー伊藤領水　吉野山懐古ー秋山玲水　石童丸ー速水是水　小督ー丸山吼水　近藤勇ー長谷川錦候　屋島の誉ー中谷美水　太田道濯ー山口棋水　本能時ー小泉井水　白虎隊ー斉藤初水　木村重成ー座間嶽水　井伊大老ー石井桑水　常陸丸ー仲川秀邦　曲垣平九郎ー中谷襄水　吹雪の敵ー会主速水是水。

一水会京都支部例会

しばらくは花の上なる月夜かな（芭蕉）

四月十八日(日)午後、花も散り果てんとする京都東山本妙寺で例会。東京から萩野甲水先生を迎え全員元気な顔を見せ合った。先生の所望もあって全員の録音は木下皇水氏の操作により約二時間の謹聴演奏であった。美声と節廻しの新味。崩れに曲の山を盛り上げる。詩吟練磨による地声。錦心流の弾法と音声の使い分け。しんみりした持ち味。表現への工夫。文学的な歌い方。全音妙えな弾法。明るく爽かな美しい歌い振り。何れも永年歌い続けて止まない諸氏で、個性豊かに暢び暢び歌われ、琵琶を通じてこそ人間がなおも造られてゆくの感を強くし六時解散。尚前回は神戸から会友田中歓水氏とゲスト楊氏の来会、御熱演を拝聴した。（四・二〇鴨水記）

薩摩琵琶正絃会四月例会

四月十八日(日)昼東京芝愛宕山菜根。月下の陣ー大旗　七卿落ー本橋　城山ー吉田　彰義隊ー正本　春日野ー大越　王昭君ー堀越　姫百合の塔ー栗原雨竹　桜狩ー柏木篁道　二葉の楠ー遠藤鶴東　風林火山ー鈴木鶴謳　形見の桜ー池野谷吟岫　白虎隊ー仲川秀邦　本能寺ー青沼紅舟　川中島ー清川嵐舟　武蔵野方丈記ー伊集院皷城　飯盛山懐古ー生田晃堂　形見の桜(三)ー鈴木鶴岡　弾法ー辻靖剛。尚次回は五月十六日同所にて開催の予定。

筑前・薩摩琵琶春季演奏大会

四月十八日(日)昼松山市民会館、主催愛媛琵琶連盟、後援県教育委員会外。君が代ー会員白虎隊ー大西　大田道濯ー大木　白虎隊ー森本　衣川ー外沢旭悠綾　扇の的ー原田旭悠鳥　戻り橋ー斉藤旭苑　漢詩ー松本旭翠　曲垣平九郎ー和田旭秀　舟弁慶ー井出旭明　静ー佐々木耶水　坂本竜馬ー遠藤旭佳　衣川ー村上旭隆　城山ー栗田絲水　源実朝公ー西森旭生　川中島ー佐藤晃紘　桜狩ー谷口旭英　竜の口ー立花雪水　西郷隆盛ー佐竹旭都　本能寺ー浅田芳水・尺八、立方入　茨木ー外久旭好　船弁慶ー内野旭仙。

醍醐寺桜祭り諸芸大会

京都伏見醍醐寺の桜は豊家華やかなりし頃の秀吉花見の宴で有名である。しだれ桜、山桜が三宝院や五重塔を背景に咲き乱れる四月十八日(日)昼境内邦楽殿に於て大阪琵琶同好会を主体とする首記が開催され、井伊大老ー養老駿水、白虎隊ー宮之原聖水　村上喜剣ー光旭仙、二〇三高地ー水谷旭甫、本能寺ー辻旭城　関ヶ原ー石橋旭嶺　桜ー和鶴会員合奏　松の廊下ー中山鳳水　粟津の露ー天津八千代、以上の外扇舞、剣舞、日舞、詩吟等で聴観衆を喜こばせた。

錦心流春の演奏会

四月十八日(日)昼名古屋中小福祉会館、主催一水会名古屋支部、後援中日新聞社外。月下の陣ー横井　城山ー成瀬、原田　河内の宿ー岩間　川中島ー吉見輝水　屋島の誉ー中西穂水　石童丸ー坂井田孝水　新撰組ー丹野鯱水　松の廊下ー安江弘水　粟津が原ー三輪花水　俊寛(下)ー大西絃水　湖水乗切ー谷津壮水　小栗栖ー加藤滉水　茨木ー小林残水　西郷隆盛ー阿部勝水　吹雪の敵ー奥村慧水　（以下来賓）雪晴れー森中志水　本能寺ー仁王冥水　伊豆の御難ー田中訴水　舟弁慶ー二反田岳水。

日本芸術琵琶柏会四月例会

四月十八日(日)昼東京西新宿柏ビル六階。お江戸日本橋・門琵琶。伴流弾法ー山崎錦幽　二條城の清正ー寺内峰水　武蔵野ー坂入俊　須磨の春ー高田瑩水　青山播磨ー杉山雅俊　本能寺ー青木晴城　勧進帳ー長谷川錦舟　石童丸ー全員謡い廻し　平家物語朗読ー雨宮映月。以上研修後小宴を張り七時閉会。

三位研修同志会例会

四月二十五日(日)昼三鷹市公会堂。伴流秘曲謡切連弾ー山崎錦幽、坂本錦道　赤星崩(初)ー中村晃憲　台湾入ー田戸桜丸　威海衛ー錦道　菅公ー八束一峰　太田道濯ー伊集院皷城　城山ー西村暠峻　旅順口ー伊集院一城　白虎隊ー井会松映　平家物語朗読ー雨宮映月。

第三回錦古流新町大会

四月二十五日(日)群馬県新町公民館、主催新町錦古流愛好家。吟詠琵吟等五十番、宗家針谷錦古氏は琵吟鉢の木を演奏。

東都旭会第三回演奏会

四月二十九日(木)昼東京板橋区民会館、主催筑前琵琶東都旭会、後援旭鴻会外(一〇〇〇円)　お蝶夫人ー藤巻旭恵・絃旭陽　娘みゆきー旭祐、旭憲・絃旭陽、旭章　二〇三高地ー古川旭神　那須与市ー石田旭呂　華道華の恵みー旭星、旭茜・絃旭鴻、旭陽、旭彰、旭祐　衣川ー旭冷・絃旭神　月に偲ぶー旭礼・絃旭彰　竜の口ー内田旭章　北の庄ー旭翠、旭英・絃旭鴻　茶道松風の曲ー旭容・絃旭薫、旭章　旭茜、旭憲・琴野口　若き教盛ー旭彰、旭映・尺八牧原　巡礼お鶴ー南崎旭薫　湖水渡ー藤巻旭陽　塚原卜伝ー松元旭川　対王丸ー会主藤巻旭鴻　新琵琶楽①春の舞曲②荒城の月変奏曲③黒田節ー合奏・琴尺八・バレー三人。

筑前琵琶大演奏会

四月二十九日(木)昼一時一宮市勤労会館、主催旭典会、後援日本橋会外。超満員の盛会。詩吟祝賀の詞ー合吟　別れの盃ー伊藤　木村重成ー旭恵、旭和　伽羅の兜ー伊藤旭光　井伊大老ー旭静、旭保　花の白虎隊ー旭美、旭芳　青葉の笛ー野田旭邦　西郷隆盛ー小川旭栄　羅生門ー岡田旭彩　関ヶ原ー島田旭千都落ちー坪内旭鳳　粟津ヶ原ー大野旭晴　田村邸名残の花ー田中旭法、旭美津　黒田武士